

# 総合討議

## コメント 日本史

川岡 勉

日本中世史の立場から、巡礼研究を深めていくために大切だと思われる3つの論点に触れてコメントしてみたい。

第一に、「日常性からの離脱」という問題である。巡礼においては、しばしば日常性からの離脱という点が強調される。人は日常の生活を離れて巡礼に旅立ち、巡礼を終えて日常社会に回帰する。これを文化人類学などでは、俗から聖へ、そして聖から再び俗へという意味づけを与えて説明する。離脱と回帰が一定の儀礼を伴ってなされることも重視されている。しかし、今回のシンポジウムの関哲行氏の報告では、こうした説明の妥当性・有効性を史料によって検証する必要が提起された。氏の考察によれば、単純な聖俗二元論は歴史的現実と乖離しており、実際の巡礼においては簡単に世俗と切れない面をもつ。氏は特に観光という視点を提示することにより、「聖と俗の相互浸透」という注目すべき議論を展開している。

たしかに、巡礼の過度の理想化は現実と乖離しかねない。筆者は、ここで日本中世史における網野善彦氏の「無縁」論を想起させられた。網野氏は、遍歴する人々の特質として「無縁」、すなわち世俗の縁と切れていることを強調した。氏は『中世の非人と遊女』の中で、中世に女性の一人旅がかなり展開しており、それは「性の解放」により守られていたと述べた。すなわち、世俗を離れた旅の場では男女の自由なセックスが認められ、それが女性の一人旅を広く可能にしていたというのである。しかし、こうした理解に対しては既に実証的な批判がなされており、遍歴が一切の縁と切り離されたものであるかどうかは慎重な評価が必要であろう。関氏は、巡礼であっても実際の旅は危険性に満ちており、それが女性の移動を制約していたことを指摘する。これに対し河合眞澄氏の報告では、巡礼は女性が安全に旅する手段と考えられていた形跡があると述べられた。女性の旅をどう把握するかという問題は、巡礼の非世俗性の評価と関わって興味深い。

さて、日常性からの離脱という場合、日常の場との関わりが問題となる。内田九州男氏は、巡礼先で病死した時は国元への連絡は不要と記した往来手形Aをもつ道者は、もとの身分や村町の共同体から離脱したことを強調した。しかし、往来手形Aの場合でも、日常の場と完全に切れたと言い切れるかどうかは問題である。往来手形Aと往来手形Bの差は、死体処理に関する規定の差にすぎないとみることも可能ではないだろうか。往来手形Aの中に「万一何らかの問題が起きれば、こちらから出向いて処理するのでそちらの村に苦勞はかけない」という文言が含まれていることからすれば、生きている巡礼者についてはなお潜在的に村と繋がる面を持っていたとも考えられよう。この点で、村が遍路をどのように送り出し、どのように迎えたかを具体的に洗いだした山本秀夫氏の報告が参考になる。氏は、村が遍路の出発点であり帰着点であったと述べており、これは巡礼が村と切れていない面を指摘したものとみることもできよう。四国遍路が幕藩体制の法制的な仕組みの中で展開するものであった以上、山本氏が行なった日常の場との関連を突き詰めていく作業はさらに積み重ねられていかなければならないだろう。

第二に、巡礼と日常性との関連という問題は、「聖地のあり方、聖地の求心性」という問題に繋がってくる。稲田道彦氏は、四国遍路の聖地の特徴として、日常世界ではない異界を演出できる場所が重要だと述べた。しかし同時に、札所寺院について、聖地としての説明力は決して強くないという点も指摘している。一方、小嶋博巳氏は、同じ回遊型の巡礼でありながら、六十六部は西国巡礼や四国遍路と違い、聖地が一義的に定まっていないことに注目した。巡礼地として選ばれたのは、主に中世以来の伝統的納経寺院群、一宮、国分寺、八幡宮などであるが、巡礼地も経路も随意であったという。小嶋氏はあえて四国遍路と対照的に位

置づけることで六十六部の特質を浮かび上がらせようとしているが、筆者の理解では本来の（中世までの）四国遍路もまた、同様な形態をもっていたとみるべきではないだろうか。鎌倉時代の遊行の聖一遍が立ち寄ったのは、一宮をはじめとする所々の寺院・神社であった。恐らくこれが四国遍路の本来的あり方ではないかと思われる。

小嶋氏の報告は、巡礼を聖地を前提に考える態度を見直す必要を提起している。氏の表現によれば、聖地の求心力に対する遍歴の遠心力を重視すべきだということである。この指摘は、四国遍路を考える上でも示唆的である。ここからは、日本の巡礼における求心力の弱さをどうみるかという問題が浮上する。関哲行氏によれば、ヨーロッパでは地方の諸霊場をローマ教皇庁が上から繋げていったとされる。多神教化の危険を予防するため、上からの統制・儀礼化が必要だったのである。これに対し、日本では上からの統制・儀礼化の契機は弱かった。むしろ、下からの運動として巡礼が展開していくのである。もちろん先達－御師の指導による編成・統制がなされた熊野詣・伊勢参詣などもあるけれど、四国遍路などではそうした求心的な編成原理は希薄である。日本中世には高野聖の活動が弘法大師信仰を広め、四国各地の霊場を結びつけていった。しかし、だからといって四国遍路における高野山の主導性は明確でない。

恐らく、巡礼に対する教団・宗教施設の関わり方が、日本とヨーロッパでは違うのであろう。日本でも寺社参詣（目的地への往復を基本パターンとする）の場合は、寺社の相応の関与のもとに組織化されるのが普通である。しかし、四国遍路などにはそうした関与が希薄であり、むしろ教団が関与しないところで巡礼が展開した。その点に、日本の巡礼の大きな特徴が見出せる。一遍の弟子他阿が教団化を果していくと、遊行（巡礼）の比重は逆に低下していくのである。

もちろん、時代的な変遷を軽視して安易な普遍化を行なうのは禁物である。巡礼を「歴史的に捉える」観点を重視すべきことを、第三の論点として主張しておきたい。中世まで修行者が中心であった四国遍路は、近世に入ると急速に大衆化を遂げる。そこで性格が大きく変わるのである。宗教の社会的比重が後退するはずの近世になって、遍路が大衆化していくのはなぜだろう。遍路を行なう上での物質的環境が整備されたこと、これに伴って関氏のいう巡礼の観光化が進行したことが背景にあったものと考えられる。観光化の要素が組み込まれないと、巡礼は大衆化しないのである。加えて、中世から近世にかけて日本人の心性の次元における変化を大衆化の要因として想定すべきかもしれない。

時代が下るにつれて、巡礼空間の意味づけに関して了解事項が増加する。四国だとか西国だとかの外枠がはめられ、札所や参拝場所が固まり、順序まで定められるようになる。しかし、日本の巡礼の場合は、それも極めて不安定であり、儀礼化や宗教的シンボル化の程度は低かった。八十八ヶ所の札所寺院にしても完全に固定されたものではなく、時期による異動が認められるし、番外札所などもある。札所の宗派や本尊は多様であり、参拝順序や経路も決して定まっているとは限らず、逆打ちの方が功德が多いなどという見方も登場する。結局のところ、色々な意味づけが加わっても、強固な儀礼として確立しなかったのである。むしろ、巡礼そのものを第一義とし、多くの霊場を巡ること自体を重視する価値観が存在したように思われる。ここには、行く先々で食を乞い露宿などして仏道を修行するという、中世以来の頭陀行の伝統が根強く生き続けたとみることもできよう。

現在の四国遍路においても、歩くことそれ自体に意味があるという解釈がしばしば示される。鎌倉時代の一遍においてもそうであったように、一つところに居を定めることなく歩きつづける行為そのものが重視されるのである。もちろん、歩くことと霊場における修行との比重をどのように考えるかなど、歴史的に考察すべき問題は少なくない。しかし、加藤国安氏が紹介した中国の巡礼においては、道中の様子に宗教的な態度はみられず、聖地に行ってから宗教活動が巡礼の基本だという。これが事実だとすれば、四国遍路にみられる巡礼は、すぐれて日本の巡礼の特徴を示していると考えられる。日本の巡礼の特質がいかなる歴史的・

社会的な状況から生み出されたのか、多面的・多角的なアプローチが求められているのである。

## コメント 東洋史

矢澤知行

今回のシンポジウムでは、四国遍路と世界の巡礼について、さまざまな視点からの研究成果が披露された。いずれも、各分野における最新の研究動向を反映した報告であるとともに、今後の研究にとって重要な課題を数多く提供するものであった。

東洋の分野からは、五嶽の一つに数えられる南岳衡山を題材に論じた加藤国安氏による報告「霊山と癒し——中国の南岳をめぐる——」が得られた。加藤報告は、南岳衡山の開祖慧思と、その「転生」者との説もある聖徳太子、さらには慧思を尊崇し、その「転生」地である日本をめざした鑑真という三者の結びつきを示す内容であった。

本稿では、加藤報告をはじめとする諸報告・講演の中から浮上してきたいくつかの課題について記し、今後の遍路・巡礼研究の可能性・方向性について考えていきたい。

まず、第一は、「大陸と日本列島とのつながり」という視点である。両者の間には、慧思—聖徳太子—鑑真のみならず、時代を通じてさまざまなつながりがみられた。例えば、大陸へ渡った求法巡礼僧としては、遣唐使に加わって長安に至り、『入唐求法巡礼行記』を著したことで知られる円仁や、昨年に加藤講演でも採り上げられた『参天台五臺山記』の著者成尋らがその代表例であろう。近年、彼ら巡礼僧に関する研究をはじめ、大陸と日本列島とのあいだの民間の多様なつながりを解き明かそうとする研究が脚光を浴びている。今回のシンポジウムにおいても、平安時代の四国遍路について論じた寺内報告の際に、フロアから、大陸からの影響はどのようなものであったか、という趣旨の質問が寄せられる一幕もあった。大陸から日本列島への密教の伝播は、けっして一方向的なものではなく、双方向的な運動の中からもたらされたものである。今後は、遍路と巡礼に焦点を据えつつ大陸と日本列島間の多様で双方向的なつながりを捉えなおす作業がいっそう求められよう。

第二点は、ひろく東洋全体へと視野を広げることの重要性である。例えば、四国遍路の持つ密教的要素を考察する上で、重要な視点を提供しうるのがチベット仏教である。仏教の原点としての性格を今なお強く持ち続けているといわれるチベット仏教には、輪廻転生の思想に象徴されるような独特の世界観・宇宙観がみられる。加藤報告のキーワードでもあった「転生」の背景には、衆生を救済するため転生しつづけるチベットのリンポチェ（活仏）の存在と共通するものをはっきりと認めることができる。

また、チベット仏教には、いたるところにコルラと呼ばれる時計まわりの周回運動がみられる。四国遍路とも共通するこの周回運動は、右邊とよばれる古代インドの礼法に由来するといわれるが、同様の周回運動でも、メッカにおけるタワーフ（反時計まわり）や、四国遍路におけるいわゆる「逆打ち」などと比較して、空間の把握方法の特質を総合的に再検討する余地がある。

さらに、チベットでは、山や湖を神聖視する宗教観が根付いている。例えば、カン・リンポチェ（カイラス山）やその山麓に位置するマパム・ユムツォ（マナサロワール湖）に対する信仰がその好例である。カン・リンポチェは、チベット仏教だけでなく、ボン教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の信者たちにとっても「世界の原始の中心」と位置づけられる普遍的に神聖な存在であった。また、山というものの聖地としての性格に焦点をあてれば、今回の加藤報告でとりあげられた南岳衡山や、寺内報告で述べられた中世日本における山岳信仰との関わりも注目される。

最後にもう一点、遍路・巡礼研究にとって重要と思われる課題を提示しておきたい。それは、巡礼におけ